

毛利氏歴代の子女について

會員 佐 脇 貫 一

(一)

かつて私は佐伯史談六十号(昭和四十五年一月発行)と、同六十一号(同年三月発行)に、「毛利氏の女系について」と題して、佐伯藩主毛利氏歴代の正室・側室の家系について記述した。しかし、側室について反記録その他資料が少なく、調べが行届かなかつた。

その後これを補足したいと資料を漁っていたが、たまたま毛利氏系図や鶴藩略史をみていて、これら妻妾だけでなく、歴代藩主の子女の種類についても、出来るかぎり調べてみたいと思ひだつた。もつとも手元に資料が少ないため思うように調べが進まなかつたが、だいたい歴代藩主の子女について、その縁類、家格などを知ることができた。以下歴代とその時代を考察しながら、公子女の縁家・姻族について記述しよう。

系図によると歴代の子女数は、初代高政(四男二女)、二代高成(二男二女)、三代高尚(一男一女)、四代高重(十子)、五代高久(十子)、六代高慶(八男五女)、七代高丘(五男三女)、八代高標(四男二女)、九代高誠(五男一女)、十代高翰(四男五女)、十二代高春(二男二女)となつてゐる。

毛利氏は四代高重で男系が絶え、五代高久と六代高慶(初名高定)は森藩主久留島通清の子で、高久は通清の

第三子、高慶は通清の第五子である。さて、毛利氏歴代の子女のうち、男子で他家に入り養嗣子となつた人々は、六代高慶の七男信之と八男駿、高丘の三男正志と四男季礼、五男利雄、八代高標の二男政隆と四男鶴松(夭折)、九代高誠の三男政庸と四男通純であるが、これらは後述することにして、まず女子(娘)の縁家、その縁類について調べてみよう。

鶴藩略史によると、初代高政には妹安子があつた。そこでこの女人のことから述べておこう。詳しいことばかりからないが、安子は兵衛・吉安と同じように異母兄妹であつたのではなからうか。高政がまだ豊太郎の家士であつたころ、安子は同僚の家士梶原兵七に嫁して伴藤左衛門を生んだが、いく成くもなく夫兵七に死別し、寡婦になつた。

慶長六年(一六〇二)高政は豊後佐伯荘二万石に封じられた。安子は佐伯に乗り、兄高政の保護をうけた。一方、梶原氏を継いだ藤左衛門は豊臣家に仕えていたが、若くして死したため家絶え、遺孤長兵衛は姉婿にあたる飯尾六左衛門にあずけられた。慶長十七年(一六四二)六月、佐伯にあつた安子は隊長兵衛が成人したので呼びよせ、容令として高政に勤仕させた。このとき長兵衛は菅川氏(母方の姓か)を姓告り、長兵衛隊長と称した。以東安子は菅川家におり、寛文二年(一六六二)八月没したといふ。

高政(伊勢守)には女子二人があつた。長女(名不詳)は遠江・横須賀城主松平大隅守重勝の次男淡路守重長(出雲・広瀬五千石)に嫁した。この重長は能見松平の族で、兄弟後守重忠は豊後・杵築藩松平氏の祖である。次女兆子は高政の家老益田主殿吉政の子監物の室で、高久・高慶二代の家老として毛利家の社稷をなされた益田令治の

母となった。

二代高成(根津守)にも女子二人があり、長女(名不詳)は幕府の旗本川口茂右衛門宗重の室である。川口氏は桓武平氏、孫兵衛宗清の後といわれ、川口宗倫より出ていゝる。寛政重修系図によると、川口氏は日本支七家があり、いずれも幕府に仕えている。寛永九年(一六三三)十月、駿河大納言忠長が幕府に罪を得罪て駿府城を没収されたとき、川口茂右衛門宗重は在番松平忠重、秋田俊季、新庄直好らと共に御目付として駿府城に滞在した。また次女(名不詳・清流院)は旗本平野与左衛門定秀に嫁したが、嗣もなく(正保二年)死没した。なお平野定秀は権平長泰の後という。

三代高尚(伊勢守)には一女、すなわち女子勝子があった。勝子は四代高重(側室秋野氏の所生)の姉にあたり、延室中、戸田越前守忠昌(京都所司代、三万二千石)の長子能登守忠真(後侍従、下野守都室七万七千石)に嫁したが、延室六年(一六七八)十一月病没した。(高懸院と諡す) 忠昌・忠真の祖は三河以来の徳川譜代で、戸田三郎右衛門重次といい、慶長六年三河・田原一万石に封じられて譜候となった。

(二)

關ヶ原合戦前の毛利高政は豊太閤よりたての大名として、豊臣政権の存続をもつとも熱望する將領の一人であったが、大坂城の秀頼を擁した石田三成ら五奉行の不穏な動きには、いよいよ恐れを感じていた。しかし、豊太閤の恩顧を思ふ高政は、大坂の命とあらば拒否することができなかつた。慶長五年(一六〇〇)七月、石田らの挙兵を察しながら、命のままに丹後田辺城(城主細川忠興)を囲んだが、高政は細川氏と戦う意図がなかつた。

徳川家康(東軍)の西上と關ヶ原に敗撃した石田三成方(西軍)が惨敗して、徳川氏の権威が諸大名を制圧するや、さき戸倉行重とはかつて田辺城の囲込を解き待機していた高政は、藤堂高虎を通じて家康に謁し東軍に属した。一方、高政にかわつて日田隈城を守備していた沼吉忠(沼津人)は東軍に味方した黒田如水の將栗山利安に湖城を勧告されたが、主君高政の立場を知るだけに、栗山と一戦を交えた上、その勧告に従つて帰属した。

高政も武功派といわれ、加藤(清正)・福島・淺野らの諸將と同じく、高台院(秀吉の北の方)側の大名であったから、石田をはじめとする変僚派(五奉行)とは不仲であった。關ヶ原合戦後、東軍に帰属した高政は本領安堵の処置をうけ、豊後・日田隈城二万石を安堵されたが、翌慶長六年(一六〇一)四月、新知二万石として佐伯荘に転じ、日田・玖珠の公田二万八千石を預り地として管理することになった。(恩榮録による)

家康が正式に江戸幕府を開いたのは、征夷大將軍に任命された慶長八年(一六〇三)二月であるが、すでに慶長六年には豊臣氏に代る政権として、その権威は諸大名を帰服させた。高政は藤堂氏らにならつて、しだいに徳川幕府の威令に服したが、慶長十二年以後になると、外藤大名である毛利氏を如何にして存続させるかき考えなければならぬようになった。それは筒井定次(伊賀上野九万五千石)・前田茂勝(丹波八上五万石)・中村忠一(伯耆米子十七万五千石)・澁川雄利(常陸片野二万石)・堀忠俊(越後福島三十万石)らに徳川氏と親しかつた外藤大名が、改易になる理由もないのに次々に取つぶされたことにもよるが、とくに晩婚だつた高政は、四十五才(慶長八年)まで世継ぎの男子にめぐまれなかつたので、毛利氏の存続について憂慮が大きかつた。(藤堂録)

慶長十八年(一六二二)五月、当時十一才の長男勘八郎を江戸に伴い、將軍秀忠と犬御所家康に謁見させ、任官、摂津守高成と名乗らせだが、これは高政の憂慮をものかたる説話である。

高政の二女子のうち、長女は徳川譜代の旗本、出雲広瀬五千石松平淡路守重長に嫁しているが、おそらく元和二年以後の替嫁であったと思う。

元和元年(一六二五)五月、豊臣氏が滅亡すると、もはや徳川氏に及向う勢力はなく、いわゆる元和偃武の時代になった。そして元和から寛永になると、將軍は三代家光となり、全国の大小名は譜代・外様の別なく、いづれも幕府の家臣として服属することになった。高政の次女兆子は佐伯藩家老益田監物の妻になったが、摂津守高成の二女子は幕府の旗本川口・平野両氏に嫁ぎ、三代高尚の女子は都屋住みながら当時、京都所司代をつとめた譜代大名戸田忠昌の長男忠真(徹登守)の室となった。こうした記録から考えると、高政が遺した佐伯藩の幕府に對する方策は、つとめて譜代の大名・旗本と縁組みして、幕府の有力者に接近し、藩の安泰をはかろうとするものであったようだ。

(三)

佐伯藩は二代高成、三代高尚、四代高重と、歴代がいずれも壯年期の三十念で病死した。三代高尚は承応二年(一六五三)四月、二十三才のとき將軍家綱の御側衆で翌承応三年京都所司代に任ぜられた牧野佐渡守親成の女と娶って夫人としたが、この牧野氏(名不詳)には子女がなく、まもなく難縁になった。藩史には「故あつて去る」と記されている。四代高重は高尚の側室牧野氏初子の方を母として、寛文二年(一六六二)三月に生れた。彼は寛

文四年(一六六四)十一月、年齒わずかに三才で家督を継ぎ、延宝四年安房守に任官したが、天和二年(一六八二)四月、仙井俊福業景通の招宴に赴き察病、ついで死亡した。とき高重は三十一才、その年下總小見川一万石内田出羽守正衆(譜代)の女を夫人に迎えることになっていたが、また結婚はしていなかった。正室もなく、側室もない高重には一人の子女もなかった。このことが幕府に知れると、藩家断絶の因となるので、江戸家老益田治は幕府精氏の間を奔走し、森藩主久留島通清の三男勲負をすてに養子に迎えていることになった。これが五代高久であるが、この人は極弱で藩政を見ることができなかつた。貞享三年(一六八六)十二月、陸奥盛岡藩主南部行信の女清久子と娶り夫人としたが、病気のため結婚生活ができず、翌四年五月、夫人南部氏を離別した。藩では高久の意をうけて、久留島氏より助十郎(幼名千代徳・通清の五男、高久の実弟)を迎えて養嗣子とした。

(四)

六代高慶ははじめ高定と称したが、後高寛と改め、さらに享保十四年(一七二九)三月、高慶と改名した。高慶は歴代のうちでもっとも在職が長く、藩政を刷新改革して治績をあげ、佐伯藩中興の英主と称せられてゐる。

高慶には正室宗氏(名日根子)があつたが、延徳四年(一七二四)九月病没した。高慶は以後正夫人を娶らず、その子女十三人のうち宗氏生むところの嫡男高通のほかはすべて側室(お部屋という)侍妾の所生であつた。

〔注〕宗氏家譜略によると、高慶夫人根子は延宝七年正月廿一日誕生、お部屋は宗氏家譜養父の八女、母は妾藩氏という。初名「於宗」、また「於親公」と称した。

高慶の八男五女のうち、成人したのは男四人(高通・

高能・信之・聚、女三人（吟子・辨子・皆子）で他は
みを夭逝した。

さて、三女吟子は享保十二年（一七二七）十一月の生れ、
生母は佐伯城内で仕えた侍妾の一人だが、名は伝わって
いない。元文三年（一七三八）七月、十二才のとき旗本新庄
越中守に嫁したが、ほどなく離婚、江戸藩邸にあって名
を富子と改めた。寛延二年（一七四九）四月、出雲母屋一万
石松平志摩守直員の長子頼母直道に再嫁した。この松平
氏は結城宰相秀康（家康二男）の後で、「越前一伯」こ
と松平忠直の弟直政（出羽守・出雲松江十八万六千石の
の三男隆政に出ている名門である。しかし、故あって離
縁、宝暦二年（一七五二）四月、三度嫁して旗本交代寄合衆
美濃守手五千石竹中主藤正元濂の室と交へた。（寛政九
年五月没、法泉院と諡した）。

（六）（逆） 交代寄合衆とは三千石以上の未没の旗本で、大名に準じ采地に
居住し、隔年江戸に参勤交代する者という。

三四女辨子は享保十四年（一七二九）九月の生れで、生母は
江戸藩邸に侍した妾某（名不詳）。鶴藩隠史にいう「寛
延二年（一七四九）大叔母辨子、七炊頭戸田忠言（下野足利
一万石）に嫁す」と。当代の佐伯藩主周防守高直は六
代高慶の孫に当り、摂津守高直の長子である。高慶の女
で高直の妹にあたる富子・辨子・皆子は、いずれも高直
にあって大叔母である。辨子の嫁した戸田大炊頭忠言は
出雲守志摩の子で、足利藩は前出の宇都宮七万七千石戸
田忠真家の支藩であるが、辨子は嫁して二年足らず寛延
四年五月逝去した。（諡号と清台院という）
五女皆子は、享保十六年（一七三一）五月の誕生、生母は
富子と同母のようである。寛延三年（一七五〇）十一月、二
十一才で旗本大久保敬純（通称宗三郎）に嫁したがほど
なく離婚、宝暦十二年（一七六二）二月、旗本五千石巨勢日

何守至忠に再嫁した。この巨勢氏は八代將軍吉宗の生母
淨阿由利の方（紀州）の巨勢六左衛門利清の女）の
弟巨勢伊豆守至信の子である。

高慶の公女三人については前述したとおりであるが、
男子四人については長男高直は病弱のため廢嫡、六男高
直（後高能と改む）が代って嗣子となったが、元文五年
（一七四〇）正月、痘瘡と病没した。（年二十四才）こ
の左め嫡孫にあたる徳高（後の高直）が嗣となり襲封し
た。七男信之は幼名松次郎のち内膳と改めた。母は側妾
藤原氏津与子、享保五年（一七三〇）六月の生れ、元文五年
十一月、盛岡藩南部氏の分家南部経殿養信の養嗣子とな
り主計信之と称した。八男聚は扶掖公子の号で知られる
文人、礼楽をまっけて一家をなす学者でもあった。彼は享
保十五年（一七三〇）十月佐伯城内で誕生、生母は側室與井
氏（志綾子）、幼名と源十郎といへたがのち浪江と改め
た。宝暦七年（一七五七）水戸藩老職山野辺兵庫頭義胤の養
子となり、圖書義方と名乗ったが、山野辺家にあること
二十年、安永六年（一七七七）七月、去って森氏に復した。
それより森聚と称し江戸自銀の佐伯藩邸に在ったが、天
明六年（一七八六）七月病没した。この山野辺氏は出羽の名
族最上氏の流れ、最上出羽守義光（出羽山形五十七万石
）の末子山野辺右衛門義忠が最上氏の没落後、水戸頼房
に仕えたものである。

(五)

七代高直は五男三女があった。鶴藩隠史にいう「長
七秀太郎といひ早く卒す。次は高標といひ、次は正志と
いひ、次は栄子といひ、次は光子といひ、次は季礼とい
ひ、次は晴子といひ早く卒す。次は利雄といふ」と。す
なわち五男三女のうち男女各一人を亡く、四男二女が成

人したのである。そこで例によつて公女子から縁迎せらるることによつた。

高丘の長女栄子は初名増子、空曆六年(一七五六)二月の生れ、生母は側室佐原氏(貞喬院)である。栄子は安永二年(一七七三)五月、美濃高富一方石本庄大和守道徳の子伊勢守道利に嫁した。この本庄氏は五代將軍綱吉の生母桂昌院阿玉の方の縁族で、阿玉の方の養父亦正宗利の長男北小路道芳(二条家の諸大夫)が、義妹阿玉、方が縁によつて幕府に仕え、本庄氏を名告つたもの。道芳の孫宮内少輔道章のとき、美濃高富一方石に封じられた。

〔註〕桂昌院阿玉、方、名目宗子、秋野殿と称す。本庄(庄)宗利の養女なり。実父其(八百屋仁左衛門)といふは京師の人なり。其女子ニく生れみて没す。妻嬪(申もめ、後家)と名なり。寡居す。宗利嬪婦と迎へとりて妻となし一男を生む。これを本莊宗賢(従四位下侍従兼田幡守、常陸空曆五万石)とす。また其の三女を鞠養す。姉は大宮後重に嫁し、次は君(阿玉の方)なり。性好姫(阿高の方)に從つて江府に赴き、春日局に憑る。長すこぶる容色あり、特に大御公へ將軍家光に從侍す。公見て大いに悦び、因りてこれを幸す。賜る有り、秋野と改称す。正保三年正月を以て常憲公(綱吉を生む)。

(綱吉を生む)

(大日本野史より)

高丘の次女光子は空曆六年(栄子と同年)九月、佐伯城内に生れた。生母は妾佐川(鎌田氏)である。空曆十二年(一七六三)三月、分家森吉共の次男勘兵衛吉房の後である藤原兼本三百石(三石石と同じ)森忠右衛門の長男震太郎と婚約、安永中これに嫁したが、その後賢忠右衛門事に座して家断絶、光子は離縁となつた。

高丘の公子正志・季礼・利雄はいずれも旗本各氏の養子となつた。三男正志は空曆三年正月の生れ、母は側室佐原氏、幼名と土之助といつたが、乃ち三十郎と改められた。

明和七年(一七七〇)十二月、旗本花房因幡守正城の養嗣となり、外記正志と改称した。花房氏は足利氏族で、宇喜多直家に仕えて剛勇をうたわれ花房助兵衛職のの後、旗本の支庶八家がある。四男季礼は正室鳥居氏(萱子)の腹で、空曆七年六月の誕生。幼名と峯三郎の子改めて中務といつたが、安永九年(一七八〇)十一月、磐城三春藩秋田氏の支族、秋田淡路守季高の養子となり、中務改め水藤季礼と称した。秋田氏は奥州前九年の役で著名な、安倍貞任の後で名族安東氏の裔、秋田安房守実季は關ヶ原の役後徳川氏に帰属し、常陸空戸五万石に封じられたが、子俊季のとき三春に移封された。支族三家がある。

五男利雄は空曆八年三月の生れ、生母は正志と同じ佐原氏、幼名は徳十郎の子伊織と改称した。安永六年(一七七六)八月、旗本澁川利友の養子となり、兵庫助利雄と名乗つた。澁川氏は伊勢國司北島氏の一族、澁川三郎兵衛雄利(羽柴下野守)の子、老成守正利の後である。

(六)

八代高橋は四男(高誠・政雅・市次郎・鶴松)二女(次子・岩子)があるが、二女子はいずれも夭逝し、男子は正嗣高誠と次男政雅のほかに幼くして死亡した。高橋夫人加藤氏(照子)には男子がなく、高誠と政雅はともに側室田中氏(三輪子)の腹である。さて政雅は安永七年六月の誕生で、幼名松之助、旗本小笠原安房守政恒の養子となつて、主計政雅と称した。

九代高誠には五男一女があつた。このうち二男一女が夭没し、三男子のみ成人した。すなわち高翰・政庸・通純である。高誠の三男政庸は幼名久松、文政三年(一八二〇)旗本杉浦政行の養子となり、勘解由政庸と称し、四男通純は享和元年(一八〇〇)の生れ、幼名茂松、久留島通止の嗣

となつた。なお旗本杉浦氏、桓武平氏、三浦杉本氏族、寛政系図によると、幕士（旗本）に十七家がある。

(七)

十代高輪の四男五女について調査が行届かないが、公女四人はいずれも大名・旗本家に嫁している。長女満子は文化十年（一八一三）の生れ、母は正室井伊氏（勝子）、文政十二年（一八一九）十二月、細川中務少輔行茶に嫁した。この細川氏は肥後熊本五十四万石細川奔護家の支藩、宇土三万石細川立政の長子が中務少輔行茶である。三女菊子は文化十四年（一八一七）正月生れ、母は夫人井伊氏、天保五年（一八三四）旗本荒本利和に嫁した。四女泉子は文政元年（一八一八）十月の生れ、生母は妾佐伊子、天保四年（一八三三）十一月、下野喜連川五千石（大名格）喜連川左馬頭宣氏に嫁した。五女孝賀子は文政二年（一八一九）の生れ、母は夫人井伊氏、天保八年（一八三七）四月、大副肥前守の長男辰之丞に嫁した。喜連川氏は石高は低いが大名称の家柄、足利氏の直系古河公方義氏、齋、喜連川公方國朝の弟、五馬頭頼氏の後で、九代の子孫左兵衛督彰氏の妹嫁子に九代高誠の夫人である。大副氏は武蔵耳堂の流札、大田原資清の子資増が大副晴増の後を継いで、左衛門佐資増と名乗り、関ヶ原の役後下野黒羽一万九千石に封じられた。支庶一家がある。寛政系図によると同氏は肥前守はなく、肥後守が三人ある。

以上はなほだ杜撰な調査であるが、鶴藩歴史・佐伯郷土史など記述を、多少なりとも補筆できれば幸いである。

（おわり）

東京史

文化都市佐伯への躍進を 麻生英臣

序 略 その後史談会の文化活動はいかが進展していかすか。造船不況を軸に、佐伯の街がはかばかしくならない様子かしのはれ、大鶴市長になってより、佐伯の行政にどんな手が打たれるか、大いに興味あるところだ。工業立地をはじめとする経済活動を盛んにすることの意味は、最も大切なことであることばかりですが、佐伯という地勢、風土から、今後大中を経済活動の伸びが期待出来ないことか、佐伯市民は何に楽しみを見出し、何を誇りに生きがいを感じることになるのでしよう。

目下日本の行政は中央より地方の時代に移りつつあり、それ以前にその地方に於いて、そこに有る資源を活用して、しかも文化的意義を持つて定住をせよということになり、それが市の町村にある歴史的な文化資源を復活させ、共同体意識を鼓舞し、自立した市民生活をくりひろげようとするもので、全国的なブームがあります。佐伯の行き方はこの時節、文化活動問題を研究すべきと、もろに求めていると申せましょう。（中略）市立図書館・民芸資館・佐伯地方の民話伝説の調査、民話や踊りの記録整理など、実に多くのことが考えられ、市の教育委員会と組むなりして、活動なすって下さい。同封レポート資料は、そのうち大鶴市長にも見せて下さい。そして大分県南部地方の文化活動で、他県・他市からつらやまれるような市民コミュニティ文化活動もやっています。私も遠く東京に往んでいます。古い歴史及び歴史的資源を内包する佐伯に誇りを持っていきます。そして色々なアイデアを持ってまいります。観光行政手段でもアイデアをもっています。ではそのうちまた。